

日本作業科学研究会ニュースー作ら，さくらー第14号



発行年月日 2013年10月7日
発行者 日本作業科学研究会広報係
ウェブサイト <http://www.jssso.jp/>

子の作業

副会長 酒井ひとみ

昨年11月に父が他界した。母は4年前に他界したので、実家はついに空き家となってしまった。初盆に合わせてまとめて休みを取って帰省し、妹と「父の気がかりの引き受け」と「遺品の整理」をした。

生前、父が気にしていたのは、五代目当主としての先祖供養と墓守のことだった。肺癌になり弱気になった父に、「大丈夫、任せておいて。私たちがちゃんとするから、心配しないで。」と断言した手前、本気で受け止める覚悟をした。実家の仏壇の引っ越し、御本尊さんの魂の移し替えをした。これからは、先祖供養にまつわる親戚付き合い等も命の限り受け継ごう、そして、その後のことは遺言にしたためようとした。

もうひとつの気がかりは、バブル時代に入手したりリゾート地とは名ばかりの「金食い土地」の存在だ。いまや買い手も貰い手も無く管理費や税金が課さんでいくものだった。管理人さんと会い、話を聞くうちに、区画によって地目が異なり課税の有る無しがあることを知り、町役場の税務課に確認を取った。すると、その土地は、草刈りをして土地をきれいにしていたので、宅地扱いとなり課税対象になっていることが判明した。地目を雑種地に変更する方法を調べ、以後、「金食わない土地」にすることができた。以前から気にかけていることは知ってはいたが、本気で聴いてあげていなかったことに今更ながら気づき、

申し訳なさで妹と二人で涙した。

日が暮れると写真や手紙、書籍等の整理をした。初めてみるものも多く、両親から聞いていた断片的な話を手がかりに、「これは、育児をお母さんに押し付けて、卓球ばかりしてた頃のじゃない？」とか、「このチャラ男はなんだ！お父さんは、お母さんと一緒になったから、ここまでこれたんだよね。」等、言いたい放題で夜が更けた。

遺品をそれぞれの自宅に運んだり送ったりした。道すがらに、霊柩車と行きがちがい、咄嗟に「親指隠した？」と妹と言いつつから、親の死に目に会えなくなるからとやっていた習わしだったことに気づき、「もう、隠さなくてもいいのか」と死に目に会えなかった私達は神妙な面持ちになった。後悔ばかりの看取りだったと、互いに吐露し、泣いたり笑ったりしながら、例年のない猛暑の中なんとか遣り切った「子としての作業」だった。

第17回作業科学
セミナー 福島
H25.11.30-12.1

財団法人太田総合病院附属太田熱海病院
齋藤 佑樹

いよいよ 11 月 30 日（土）12 月 1 日（日）に第 17 回作業科学セミナー福島が開催されます。おかげ様で事前参加登録は 150 名を超え、また多数の演題申込みをいただきました。参加申し込みをしてくださった皆様、そして演題を登録してくださった皆様に心より感謝申し上げます。

福島セミナーが、参加される皆様にとって有意義な経験となるよう、実行委員一同、開催準備に励んでおります。

今回の講演は、基調講演がトロント大学のヘレン・ポラタイコ先生による

「Understanding occupation : An occupational therapy imperative」 (作業の理解：作業療法に不可欠なこと) . 佐藤剛記念講演が、茨城県立医療大学の齋藤さわ子先生による「作業を通して人を理解すること」. 特別講演が、檜葉ときわ苑の木田佳和先生による「震災から現在、そして未来へ～作業的存在としての姿を取り戻すための支援～」です。どの講演も作業科学を学ぶ我々にとって貴重な時間となると思います。

演題発表も、研究分野、実践分野共に多数の発表が用意されています。また、ワークショップは、参加者同士で話し合いを通して知見を深め合い、その後の貴重講演で話し合った内容を更に深められるような流れを想定して準備を進めております。

初日の夜に開催される懇親会では、福島の郷土料理や伝統芸能を楽しんでいただけるよう準備を進めております。サプライズイベントも準備中です。

晩秋の頃、美しい紅葉と共に皆様をお迎えしたいと思います。東日本大震災で大きなダメージを負った福島が、復興に向けて元気に歩きだしている姿を皆様にお見せできるよう、

実行委員一同頑張りますのでよろしくお願いたします。

理事会議事録

平成 24 年度 第 4 回日本作業科学研究会理事会 議事録

日時：平成 25 年 6 月 29 日（土）13:00~15:00

場所：大阪府 リーガロイヤルホテル内 紅梅

出席者：港，西方，酒井，青山，小田原，近藤，西野，吉川，古山，齋藤（ゆ），鈴木，坂上

【議題：報告と審議事項】

I. 各委員会より

1. 学術委員会

1) 機関誌編集班

・投稿規定と執筆要領を改定し第 6 巻 1 号から適用。

・2013 年末まで論文ごとにフリーダウンロードできるようにした。7 巻からは最新刊は 1 年間会員のみにフリーダウンロードできるようにする。

・新コラム「作業的存在としての私」（仮題）を設定する。

2) 研究推進班

・研究法を学ぶための研修会の実施報告。最終的に 34 名参加。第 2 回を開催する予定。

3) 実践につなげる班

・実践につなげる研修会の実施報告。午前中は講義，午後はワークショップを行った。

・今後は 2 つの研修会で入門的な内容も含めて行うことを確認。日程は他の研修会と重ならないように配慮。

4) 啓発・国際情報班

・JOS2012 年の抄録の訳，HP にアップ済み。

・松井菜奈子さんを委員にすることを了承。

2. 広報・ネットワーク委員会

- 1) ホームページ担当
 - ・IT管理者の雇用契約を2013年12月より「つるひめ」に変更する。
- 2) 研究会ニュース担当
 - ・研究会ニュースを9月に発行する予定。
- 3) メーリングリスト担当
 - ・メーリングリスト運用規定に注意事項をいれてHPにアップする。
3. 学術研究会
 - ・第17回作業科学セミナー準備状況の報告。福島県の補助金を申請予定。メーリングリストを使って演題を募集し、演題はできるだけ多く聞けるようにする予定。
 - ・第18回以降作業科学セミナー開催地の検討。今後、候補者に確認をして決定する。
4. 統括（研究会会長）
 - ・24年度から新しい組織が動いているがこのまま継続することを確認。
5. 事務局（2013年6月29日現在）
 - ・会員数249名。
 - ・収支：696,839円。支出：686,860円（+30,000円）＊単年度だけでみると赤字。今後対応策を考える必要がある。

II. その他の検討事項

- 1) 予算執行について
 - ・会計年度と次回総会開催のタイムラグがあるが、臨時総会を行わないこと了承。



研修会報告

去る6月に「作業科学にまつわる研究法」の研修会が盛況のうち終了しました。お二人の参加者より感想文をいただきました。次年度の開催日程は、福島県の作業科学セミナー時に開催される総会で決定されます。開催の折には、ぜひ皆様もご参加ください。

クライアントの作業って何だろうを

問い続けることの意味と方法

-第1回作業科学にまつわる研究法研修会

に参加して-

西宮協立リハビリテーション病院

平田篤志

私の作業科学との出会いは、作業療法士3年目に訪れた。作業療法の専門性に悩む日々友人に紹介された著書「作業って何だろう」でした。そこにある作業とは、これまで教えられた作業とは全く異なる言葉のように感じ、深みと広がり戸惑い、同時に魅力的な言葉でもありました。あれから3年、どれほど作業を知ることができたか、どれほど作業を取り扱うことができたか、明確な手応えのないまま今日に至ったように感じています。本研修会に参加した理由は作業を知りたいから参加した、というものでした。

もう一つの目的は、臨床で作業科学の知識や研究がどのようにつながるかを学ぶことでした。酒井先生の研究法総論では、量的研究と質的研究の理解を深めることができ、特に質的研究において、現象に新たな見方を発見する過程は日々の臨床に対する自身の姿勢をイメージすることにつながることができました。近藤先生の講義から、論文の読み解き方について、提示された手順に従って読むことで親しみやすく理解を深めるテクニックを学びました。港先生の講義から、ある研究疑問を解決し、そこから新たな研究を生み出し、社会貢献のシステムとして発展させてこれら

た過程を学びました。参加者の 2 名の先生から現在デザイン中の研究報告があり、参加者全員で作業と健康の関係性をもとに研究内容を吟味していく過程を学びました。懇親会において、たくさんの先生方と医療現場で作業を実践することの悩みや楽しみをディスカッションさせて頂きました。近藤先生から「悩みを解決するために researcher になりなさい」との言葉を頂き、その意味を深く受け止めています。

今回、研修会に参加することで、自身の臨床に対する姿勢を明確にすることができました。作業を扱う専門職として、自身の臨床の中でクライアントの作業をどのように捉え、扱うことができているか、また、そのことが人の健康と幸せにどのように影響しているか、作業の視点で過程と結果を明らかにし、疑問を持ち、解決に向かう姿勢が大切であることを学びました。作業療法の効果をクライアントや他職種、自分自身にも明確にできるようになるために、目の前の臨床で起こる現象の中で、クライアントの作業って何だろうを問い続けることの意味と方法を学ばせていただいたと感じています。今後の臨床での思考として大切に、実践していきたいと考えています。

第 1 回作業科学にまつわる研究法研修会に参加された皆様との出会いと良き刺激を頂いたこと全てに感謝しています。

第 1 回作業科学にまつわる研究法研修会

関西福祉科学大学
由利 裕巳

今回、私の作業科学との関わりを振り返るとともに作業科学にまつわる研究法の研修会に参加した感想を述べたいと思います。数年前に Well Elderly Study が作業療法ジャーナルで紹介されたとき、「作業療法はこれだ！」という感動がありました。私にとって作業科

学への入り口はこの時だったと思います。しかし、その頃は論文について特に勉強をすることもなく感動だけで、当時勤務していた高齢者のデイケアで対象者に向き合っていました。

そして数年後の、2010 年修士の研究において介護予防教室への介入研究を計画する際に参考にしたのが、遠い記憶の中にあった Well Elderly Study でした。資料を集め、論文を訳し、どのような介入方法で行っているのかを調査していくと、作業科学という世界がその先に広がっていました。しかし、残念ながら修士の研究に取り組んでいるときには作業科学については十分理解できないままでした。

今回、修士を終了し博士に進み、作業科学について学べる機会に期待を持って参加しました。修士の研究をどう発展させるかについて検討している時期でもあり、そのヒントを得られたらという思いもありました。結果は、Well Elderly Study の関連研究についてや港先生の博士研究に至る考え方など、盛りだくさんの内容で、消化不良気味ながらも、日頃の疑問を解決するヒントをたくさんいただきました。

そのような中、二日目の最終に行われるワークショップにて、個々の研究事例についてディスカッションをするという募集がありました。たくさんのブレインが集まっているこの機会に、「自分の研究に対する意見を頂けたらラッキー！」と思い、あつかましくも立候補させていただき、幸運な機会を頂きました。

結果はやはり、ラッキー！でした。私が修士課程で行った研究について説明し、博士研究に向けた今後の研究計画に対する意見をいただきました。

具体的には、資料の配布もない状態で、まったく私の研究を知らない人に対し、自分の研究を手短に説明するという難関がありました。口頭で説明するにはポイントを絞って、

研究疑問と研究仮説、研究方法、結果について、端的にわかりやすく説明するということに全力を注ぎました。修士の研究は、「地域在住の二次予防対象の介護予防教室に参加する高齢者に、『生活の目標』を設定する支援をすることで、QOLや介護予防効果が向上するのではないか」という仮説を検証する介入研究です。ここでは、自分の研究を客観的にとらえるという経験ができました。

次に、参加者の皆様からの質問や先生方からの質問や助言では、私の研究が量的な研究であることや、Well Elderly Studyを参考に、その手法を部分的に導入した、『生活目標の認識を促す介入』のみを行ったことであることなど、改めて自分の行った研究の特徴を理解することができました。

さらに、博士の研究に繋げるに当たり、今後何を明らかにするべきなのかといった考え方について、具体的にはそれぞれの対象者の質的な変化の検証の方法の提案や文献検索のキーワードに至るまで、講師の先生方から意見をいただきました。質的研究についておよび、研究の発展について知ることができました。また、講師の先生方にサポートを受けながら、参加者の皆様からの多面的な疑問や意見をいただけたのは、とても新鮮でした。自分のもやもやした疑問（まだ私の頭に中に疑問として形にならない疑問の種？）を発芽させるきっかけをいただいたような感じです。今後は意見や疑問をひとつひとつ検証し明らかにしていきたいと思えます。

作業科学にまつわる研修会では、たくさんの方々と意見交換ができ、思考をブラッシュアップできる！？研修会だと思います。研究に悩んでいる方、研究を始めたけれど、どうしたらいいかイメージがつかないなどのような方も研究に対する興味関心があるならお勧めです！

有意義な機会をありがとうございました。



こんな勉強会しています(^_^)

各地の作業科学関連の勉強会2つの勉強会を御紹介します。次号に自分の勉強会も紹介したいという方々からのご連絡をお待ちしております。

山口・作業維新の会（山口県作業科学研究会）

専門学校 YIC リハビリテーション大学校
作業療学科 作業療法士 渡辺慎介

平成24年3月に研究会を発足し、2～3カ月に一度勉強会を開催しております。発足動機は、広島 OS セミナー懇親会にて酔った勢いで「山口県に OS 勉強会を立ち上げる！」と豪語したため後に引けなくなったから(笑)。というのは半分冗談で、OTとしてのアイデンティティが揺らいでいた時に OS と出会い、自身が OS に支えられた経験をしたため、1人でも多くの OT に OS を紹介したかったことが大きなきっかけです。1人で発足し、県士会広報誌で呼びかけをしたため、どの程度反応があるか不安でしたが予想以上に多くの OT が集まってくれました。参加者の多くは県内の OT ですが、遠くは福岡、島根、広島からの参加もあり、現在の参加者数は平均10名前後です。

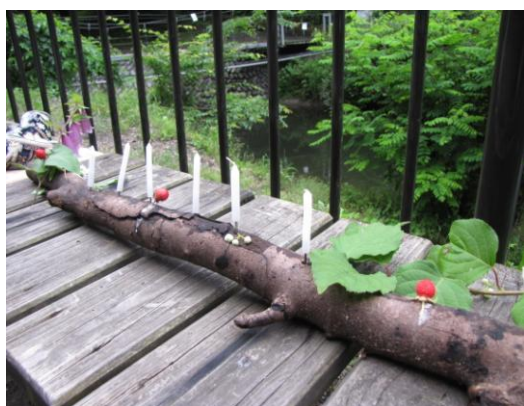
本研究会の目的は、①作業科学や作業科学から生み出される知識について知る、②作業科学から生まれた作業の知識を活用しながら実践を見つめる、③作業科学の知識を生み出

す、この 3 つを掲げております。私自身まだまだ勉強不足なところがあり、現在①を中心に、事例検討やディスカッション等を通して②についても考えながら進めております。将来的には③にも着目しながら展開できればと思っております。上記の他、人脈を広げること、参加者間で悩みを共有し今後の臨床実践のためにどのように取り組んでいくのかを建設的に検討することも大きな目的としています。

勉強会の冒頭では必ず、作業科学の歴史(作業療法の歴史)、作業的公正・不公正の概念説明をして、作業科学がどういった学問なのかを理解していただくよう努めています。これまでは、「作業」をどのような切り口で捉えていくのかを体感してほしい、作業バランス、作業を 8 側面から捉える等のワークショップを企画していきました。

発足当初は参加者が 30 名近い回もありましたが、徐々に減ってきているのが現状です。自身の作業を知ることには重きを置いていた私と、参加者との間で目的が乖離していたように反省します。やはり、OS の知識をどう実践に繋げるのかを目的に参加される人が多い印象を受けており、今後の課題は事例を通して「作業」をどう捉えていくのかを理解することであると考えています。

最後に、本研究会を通して多くの仲間と出会えたことは私にとって大きな財産です。



作業を問う会から

沖縄臨床作業療法実践研究会へ

豊見城中央病院 村上典子

H20 年冬、これでいいのかと臨床に悩みを感じ、作業療法の本質を追究したいと考える作業療法士が集まり『作業を問う会(通称: さとう会)』は発足しました。私たちが最初に出会ったのは、作業科学に関するものとは別の勉強会でしたが、その中で第 11 回作業科学セミナーの演題発表者、参加者による伝達講習が行われたことがきっかけで作業科学を学ぶための勉強会を立ち上げることになりました。この頃は、勉強会の形式を設けず、テーマも臨床に限定せず、参加者が人の作業について疑問に感じたことをざっくばらんに意見交換するという内容が中心でした。このような機会を持てたことは殆どなかったため、人の作業について話す・知識が増えるという経験が新鮮でとても楽しく、同僚や友人を誘いあって会を継続していきました。

沖縄県で第 14 回作業科学セミナーの開催が決定となったとき、有志の勉強会から県士会所属の研究会『沖縄作業科学研究会』に変更し、県全域の作業療法士に参加を呼び掛けるようになりました。「作業科学とは何ぞや」の方が多くことが予測できたことと私たち自身がステップアップしていくために、初期メンバーから講師や発表者を立て、用語解説や作業に焦点を当てた実践の事例報告を行うようになりました。参加人数は平均 20 名前後と決して多くはありませんでしたが、働くどこの領域においても、共通した悩みを持つ仲間がいることが分かりました。

そして今年度からは『沖縄作業療法実践研究会』として活動を開始しました。事例報告や文献読み合わせなどの基礎的な内容は継続させながら、シンポジウムや講演会の開催を通じて、より作業を広め、深めていきたいと

考えています。また、勉強会を立ち上げた当初から柱に掲げていた、研究にも取り組むべく活動しています。

今後も、沖縄の作業療法士が自信を持って作業療法を行えるように、研究会を前進させていきたいと考えています。

シリーズ **作業を考える@東北**

震災から 2 年半が経ちました。あの時、東北から離れた地でも不安にさいなまれた人たちがたくさんいました。3 月 11 日を境に作業の構造が変わった人もたくさんいます。

あの時の経験を語り合い、忘れることなく日々を過ごそうと思います。高橋さん、ありがとうございます。

震災で改めて感じたこと

介護老人保健施設

夢の楽園高森ロマンホーム

高橋加恵

私は、宮城県の内陸部に位置する栗原市の介護老人保健施設に勤務している。

私たちの当たり前にあった日常が崩れたのは、忘れもしない 2011 年 3 月 11 日。

被災地の中でも最大の震度 7 の揺れを記録した。施設が倒壊してしまうのではないかと思うほどの揺れであった。私から数メートル離れた場所に居た利用者のすぐ目の前に蛍光灯が落下したが、幸いにも怪我に至らずにすみ、負傷者は 1 人も出ずにすんだ。

揺れが収まり、間もなく避難誘導が始まった。誘導中も何度も余震にみまわれながら、次から次へと無我夢中で利用者を誘導した。全員が避難し終わると、雪が降り始め、防寒着を着ない利用者・職員の体へ積もっていった。

これからは、先の見えない被災地での暮らしとなる。一応の落ち着きを取り戻し、施設内へ戻るも、しばらくは電気も水もない中で

の生活となり、普段なら行えている作業である入浴が出来ない、またテレビを見る事も出来なくなってしまった利用者は、居室から出る機会が減り、他の居室の方々との交流もほとんどなくなっていった。また、利用者は夜間、しばらくの間ベッド約 100 台をホールに並べて就寝した。非常時とはいえ、大変窮屈なことであったと思う。

利用者、職員共に気を遣い、温かい言葉を掛けていたが、徐々に疲労の色が出てきた。このような状況の中、もちろん、作業療法士として、日々の訓練のように、作業を提供することは地震後 1 週間を過ぎるまでは不可能であった。当たり前であるが、身の安全や ADL を最優先することが大事となっていた。その中で、震災後すぐに行えた作業は、いつ来るかも分からない余震に対しての不安を言葉で表現し今の気持ちを共有すること、居室内といった狭い空間での日常生活に寄り添うことであったと思う。これは、作業療法士として様々な技術やコミュニケーションスキルといった立派なものではなかったのかもしれない。しかし、この大きな震災を経験し、心に傷を負った私たちには必要な作業であったと、今振り返って強く思う。また、辛い体験や状況を共感出来るといったことは大きな心の支えであり、作業のなす技であると感じた。

皆さんへのお知らせ

第 17 回作業科学セミナーの**事前参加登録**

期間が平成 25 年 10 月 31 日 (木)

に延長されています。また、**参加費の振り込み締め切りも同日**です。

会の円滑開催へ皆さんの協力をお願い致します。

編集者からのお知らせ

お知らせなど，このニュースに掲載したい
記事がある会員は，西野歩 nishino@sigg.ac.
jp まで，お送りください。ニュース発行は年
2 回の予定です。

担当理事 西野 歩

